審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は青年期の慰め行動を取り上げ、慰めが受け手の感情に及ぼす要因やその影響メカニズムの解明を行ったものである。慰めは日常的な行動であるが、その心理メカニズムの解明を行った研究はほとんどない。動物研究において進化的にどのような動物が慰め行動を行うのかといった研究は見られるものの、ヒトの慰め、特に慰められたヒトの心理（感情）に及ぼす影響、その影響要因を検討した研究は見られず、極めて独創的なものである。

また本研究は、慰めが認知的評価を媒介して感情を引き出すというモデルを、多くの研究を重ね実証的に検討し、モデル構築を行ったことも独創的である。

さらに本研究は中学生、高校生、大学生における友人の慰め行動の影響メカニズムをふまえ、青年期のよりよい慰め行動のあり方を明らかにするという、青年期の適応促進の基盤的研究という意義を持っている。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

研究は青年への面接法をもとに概念モデルを構築し、質問紙法による大量データの多変量解析によりそのモデルの実証化を行うというものであり、妥当で適切である。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

面接法では説明と同意に配慮し、プライバシーを守りながら個人面接を行った。またその結果は質的データとして適切に分析されている。質問紙データは匿名化された形で、中学校、高等学校及び幾つかの大学教員の協力のもとで収集された。データはコーディングされコンピュータに入力され、因子分析、重回帰分析、構造方程式モデリングなどの多変量解析法、また分散分析、t検定、χ^2検定など適切な手法で分析されている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

考察はデータに基づいて行われている。考察の一部は推測による部分もあるが、この領域のデータ蓄積がない現時点では、それもやむを得ないものと審査委員一同は判断した。結論はデータをもとにした適切なもので、飛躍のない妥当なものである。

本論文の基盤として、日本教育心理学会の「教育心理学研究」、日本発達心理学会の「発達心理学研究」、さらに連合大学院の「学校教育学研究論集」という３つの査読あり論文、また査読はないが千葉大学教育学部紀要で１つの論文が公刊されており、学術的にも評価を得ており、学術的に高い水準にあると言える。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は従来ほとんど検討されてこなかった「慰め」が受け手に与える影響、その心理的メカニズムのモデル構築と実証化を行ったものであり、その成果は心理学研究としても、我が国はもとより世界的にもユニークで意義のある研究である。

さらに、この研究は特に青年を対象とし、青年の友人関係のあり方と「慰め」への認知的評価や感情の関係を発達の観点から中学生、高校生、大学生で検討している。特に近年、青年期の仲間関係ではいじめへの傍観など、つらい立場にある友人への「慰め」の回避が見られるように、深い接触や感情的接触を避け、表面的な関係にとどめるような傾向が見られる。本研究は青年が一時的につらい体験をしたとしても、仲間からの「慰め」により自尊心を回復し、高めることで適応へと向かうために、そのメカニズムを明らかにすることで援助の示唆を与えるものであり、青年期の学校教育においても大きな意義を持つ。その意味で、「博士（教育学)」の学位が適切といえる。